

# 機能分析に基づく発達障害児の会話分析 —場面による相違と経験に伴う変化—

学校教育学専攻  
臨床心理学コース  
M09052E  
金子久恵

## 1. 本研究の目的

本研究では、行動分析的な視点から語用障害を捉え、発達障害児の会話の特徴を明らかにすることを目的とする。発達障害児の会話は、場面の違いによって変化するのか、他者の発話にどのように反応しているのか、それは時間の経過に伴って変化するのか、という点について分析していく。

## 2. 方法

**対象児** 対象児 A：高機能広汎性発達障害と診断された中 1、11 歳の男児 対象児 B：LD グレーゾーンと診断された小 6、10 歳の男児

**セラピスト（以下、Th）** ThA：大学院で臨床心理学を専攻する 20 代前半の男性 ThB：大学院で臨床心理学を専攻する 20 代前半の女性・筆者

**実施期間・場所** 2010 年 5 月から 11 月に、兵庫教育大学大学院神戸サテライト臨床心理相談室で行った。対象児にはおおよそ 2 週間に 1 回のペースで来談してもらった。時間は 18：00～19：00 に設定した。

**手続き** 対象児の会話を録音し、分析対象とするデータを収集した。会話データを収集する際、2つの会話場面を設定した。2つの会話場面は、A・B ペアの会話場面（以下、2人の会話場面）、A・B・ThA・ThB の計 4名の会話場面（以下、4人の会話場面）であった。各 10 分間のデータを収集した。

**言語行動の機能の分類** 対象児と Th らの発話を IC レコーダーから書き起こした。書き起こした発話は「言語行動の機能の分類」のカテゴリーに分類した。「言語行動の機能の分類」は、ある言語行動がどのような条件下で行われ、他者のどのような行動によって強化されるか、という視点から作成した。「言語行動の機能の分類」は 17 のカテゴリーからなっていた。

## 3. 結果および考察

**場面の違いによる変化** 2人の会話場面と 4人の会話場面において、対象児の平均発話数に違いがみられるか検討したところ、対象児らの平均分析発話数に差は認められなかった。4人の会話場面で、2人の会話場面と同程度の発話数があったことの原因として、Th がいることで会話に集中できる環境が作られたこと、さらに Th が対象児それぞれに発話を促すような働きかけを積極的にしたこと、の 2 点が考えられた。

2人の会話場面では、お互いがからかい、ふざけあいながら、相手の行動の変化を促すようなやりとりが行われていることが明らかになった。一方 4人の会話場面では、A は受身的に、B は積極的に会話に参加し、A・B 共に言語的なコミュニケーションに徹していることが明らかになった。

**セッションの経過に伴う変化** A は自由に振舞える場面では、その日の気分などによりセッションごとに対応が変化するが、Th がいる 4人

の場面では用いられる機能の割合は、毎回ほぼ一定であった。一方 B は、2 人の会話場面において A の発話の機能がセッションごとに変化しているにもかかわらず、B の発話の機能の割合はセッションごとに大きく変化することはなかった。また 4 人の会話場面においても B の発話の機能の割合はセッションの経過に伴って大きく変化することはなかった。

**A と B の会話の進み方の分析** 2 人の会話場面では「呼びかけ」「聞き返し」「質問」などの機能をもつ発話に対して聞き手が返答する、といった比較的単純な言語的なコミュニケーションが行われていると推測された。また、A と B がふざけあいながら、お互いに相手の嫌がることをしばしば繰り返し、それを「制止」しても相手の嫌な行動は減っていかず、ふざけあいが続いていく、という構造であると考えられた。

**対象児の会話の特徴** A は大人がいる場面と同年代の子どもという場面での対応を変えることはできるが、同年代の子どもとのやりとりについては、相手の意図を汲み取ることが難しく、自分本位に振舞ってしまうという特徴を持っていると考えられた。B も大人がいる場面と同年代の子どもという場面で対応を変える力があることが分かった。しかし、同年代の子どもとのやりとりにおいては、相手の意図を汲み取ることが難しく、相手が嫌がっているにもかかわらず、相手の楽しんでいると誤解し、相手の嫌がる行動を繰り返してしまうことがある。B のこのような特徴が、同年代の子どもとのトラブルを起こしかねず、また、どうしてトラブルになったのか B 自身が分からない、というようなことになりかねないと考えられた。

**支援への示唆** 対象児の発話の特徴をアセスメントし、その修正を意図した訓練を行う。子どもがよく行っている、的確でない応答の仕方モデルを子どもに見せる。大人と発達障害児との会話において、発達障害児が他の子どもに対して適切な応答をした場合に、大人が発達障害をもつ子どもの発話を強化する。

**本研究の限界点と今後の課題** ①健常児を対象としなかった。健常児の会話がどのようなものであるかを明らかにし、発達障害児の会話と比較を行う必要がある。②「言語行動の機能の分類」の信頼性と妥当性の検討。③Th がどのような反応を示したかについて検討されていない。Th の反応が対象児の発話数や発話の機能に与えた影響について検討する必要がある。④Th の発話に対する対象児の応答について検討されていない。Th の発話に対する対象児の応答について検討しないと、Th が対象児の発話を促すようなかわりをしたとは言い切れない。⑤二人の発達障害児が、発達障害児全体を代表しているわけではないため、今後会話状況のバリエーションをつけ、発達障害児の会話を検討することが考えられる。

#### 引用文献

稲田尚子・神尾洋子(2007) アスペルガー障害の語用論的特徴—成人—時例の会話分析の知見より— 児童青年精神医学とその近接領域, 48(1), 61-74

大井学(2004) 高機能広汎性発達障害をもつ人へのコミュニケーション支援 障害児問題研究 32(2), 22-23

主任指導教員 岩井圭司

指導教員 嶋崎まゆみ